

【剣を取る者は剣で滅びる】

[終戦の日に寄せて]

マタイの福音書

26章47～52節

熊谷 徹

2013年8月11日(日)

【序】原爆の日と『原爆投下』;

先週の八月六日、広島は原爆投下から68年目の「原爆の日」を迎えた。それから僅か三日後、八月九日には長崎が「原爆の日」を迎えた。1945年の8月、僅か4日間の中に、二つの原子爆弾が日本に投下された。

たった一発の原爆の投下により広島では推定16万人、長崎では15万人が死んだ。今もって正確な死者の数は不明だという。いずれにせよ、人類史上最大規模の大量殺人であり、最悪かつ最低な無差別大量殺人であったことは間違いない。

最近、アメリカ国内であの原爆投下は全く必要のないものだったという意見が沸き起こって来た。そのきっかけを作ったのが『オリバー・ストーンが語るもう一つのアメリカ史』という長編ドキュメンタリーである。オリバー・ストーンは、ベトナム戦争を描いた映画『プラトーン』やケネディ大統領暗殺事件を描いた映画『JFK』で知られる監督である。彼が描いたそのドキュメンタリーには衝撃的な証言が相次いで登場する。昨年、全10回に亘り全米のテレビで放映され大きな反響を巻き起こしたそうだが、私が興味を持って見たのは広島・長崎への原爆投下を取り扱った第三回「原爆投下」である。それは時の大統領トルーマンのこういう演説で始まる;「先程アメリカ軍機が一発の爆弾を広島に投下し、都市機能を壊滅させた。(略)我々は港、工場、通信施設を破壊し、日本の戦争遂行能力を完全に消滅させる」。そしてその言葉の通り、トルーマンは三日後に長崎に原爆を投下させたのである。彼が広島原爆投下の第一報を受け取った時、舞い上がり喜んでこう言った;「これは歴史上最大の快挙だ」と。終戦後、原爆より遙かに強力な水素爆弾が完成したとき、トルーマンは記者から「この恐るべき武器を使うつもりか」と質問された。彼は答えた;「どこかで動乱が起きたら、間違いなく使用する」と。私達は、今でも世界には彼と同じような考えを抱いている者達がいるという現実を知らねばならない。

貴重な証言と凄惨な映像で描かれているオリバー・ストーンのこのドキュメンタリーの最大の主張は、「広島・長崎への原爆投下は全く必要のないものだっ

たし、道徳的にも軍事的にも完全に間違っていた」というものである。このような作品が原爆投下国であるアメリカで放映された意義は計り知れぬ程大きい、原爆被爆国である日本の全国民が見るべき作品である。

全く必要のなかった原爆投下によって何十万人もの命が、無差別に、大量に奪われた。あれから68年。今年も広島と長崎で原爆死没者慰霊式及び平和祈念式典が開催され、オリバー・ストーンも式典に参列し献花した。広島の平和祈念式では今年も「**平和宣言**」が全世界に向けて発表された。松井一市長は次のように平和宣言を語り始めた；「『あの日』から68年目の朝が巡ってきました。1945年8月6日午前8時15分、一発の原子爆弾によりその全てを消し去られた家族がいます。「無事、男の子を出産して、家族みんなで祝っているちょうどその時、原爆が炸裂(さくれつ)。無情にも喜びと希望が、新しい『生命(いのち)』とともに一瞬にして消え去ってしまいました。」幼くして家族を奪われ、辛うじて生き延びた原爆孤児がいます。苦難と孤独、病に耐えながら生き、生涯を通じ家族を持たず、孤老となった被爆者。「生きていてよかったと思うことは一度もなかった。」と長年にわたる塗炭(とたん)の苦しみを振り返り、深い傷跡は今も消えることはありません。」そしてこう断言した；「無差別に罪もない多くの市民の命を奪い、人々の人生をも一変させ、また、終生にわたり心身を苛(さいな)み続ける原爆は、非人道兵器の極みであり『絶対悪』です。」

無差別大量殺人兵器、残虐極まりない非人道的兵器、そして「絶対悪」である原爆を二度と使わせてはならない。もし使わせてしまったら、人類は確実に滅びる。キリストは言われる；「**剣をもとに納めなさい。剣を取る者はみな剣で滅びます**」(マタイ26:52)。

【1】『黄色い星の子どもたち』；

(1) 今月号の「茅ヶ崎同盟教会たより(今月の言葉)」に私は次のように書いた；「『黄色い星の子どもたち』を観た。黄色い星とはナチスがユダヤ人に着用を義

務付けた「ダビデの星」型のワッペンである。ある日、黄色い星をつけたユダヤ人の子ども達が「一斉検挙」(映画の原題)で捕えられた。その後子ども達は貨物列車に詰め込まれ、ナチスの強制収容所へ送られた。その史実に迫った衝撃的な映画である。人間のうちに潜む罪の凄まじさと恐ろしさを思わずにいられない。そして、そうした狂気と悪魔的所業が「戦争」という罪と密接に結びついてきたということをおぼろげに忘れないでほしい。」。

このおぞましい悲劇は、1942年7月、ナチスの支配下にあったフランスで起きた。一斉検挙されたユダヤ人は1万3千人余り、生存者は僅か25人である。強制収容所(映画では絶滅収容所と呼ばれている)行きの列車に乗せられた子供は4051人。その子供たちは全員戻っては来なかった。

映画の主人公は国際赤十字社の看護婦で牧師の娘(演じるのはメラニー・ロラン)。彼女が子供たちの為に命がけの抗議をし、献身的に看護する姿が、見る者の心を救ってくれる。終戦後彼女は、逃亡して列車に乗らず生き延びた少年と再会する。そのシーンが見る者の涙を誘う。

(2) 聖書によれば、人間の心の中には対立する二つの原理があるとされる。一つは「罪と悪の原理」即ち罪と悪を好む原理、もう一つは「善と義の原理」即ち善と義を愛する原理である。『ローマ人への手紙』7章でパウロはこう語っている;「私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。私は、自分でしたいと思う善を行なわないで、かえって、したくない悪を行なっています。…私は、善をしたいと願っているのですが、その私に悪が宿っているという原理を見いだすのです。」(ローマ7:18.19.21)。

誰の心にもこの対立する二つの原理が潜んでいる。心ある人はこの二つの原理の板ばさみの中で苦闘する。悪と罪の原理に打ち負かされまいと苦闘する。だが、その苦闘から逃げ出した者、その戦いを放り投げ悪と罪の原理に心売り渡した者が、悪を行い罪を犯す。そしてその行き着く先、それも最悪最低の実例が、『黄色い星の子どもたち』に描かれた悲惨な世界である。

(3) 悪や犯罪、そして戦争の根本原因は人間の「心」にある。世界中の全ての人間の心が罪と悪の原理に打ち勝ち、善と義の原理によって生きようになったら、もしもそうになったら、断言する、「地上から犯罪は消え、戦争もなくなるだろう」と…。しかし、しかしである。悲しいかな、すべての人間の心がそうなることは決してないだろう。なぜなら、悪と罪の元凶であるサタンがそれを懸命に阻止するからである。サタンは善と義の原理を打破するためにありとあらゆるものを利用する。貧困と貧しきを利用したり、思想的対立や政治的対立を利用したり、宗教的対立を利用する。サタンは己の悪と罪を遂行するためにはありとあらゆる悪辣な手段を用いる。そしてサタンの目論見に加担したがる人間達を利用するのである。

(3) 我々はサタンの力に屈するしかないのか。そんなことはない。断じて「罪と悪の原理」に屈するべきではない。我々は我等のうちにある「善と義の原理」によって生きねばならない。その「善と義の原理」を強めてくれ、それに力を与えて日々新しくして下さるお方がいる。そのお方こそ、義なるキリスト、善と愛であるキリストである。二つの対立する原理について述べたパウロは、「罪と悪の原理」への勝利を与えてくれたキリストに感謝してこう述べた；「私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。私たちの主イエス・キリストのゆえに、ただ神に感謝します。」…『ローマ人への手紙』7章24節・25節である。「罪と悪の原理」に打ち勝つ道、それは義と愛の主イエス・キリストのうちにある。だから聖書はこう告げる；「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です[*或は「そこには新しい創造がありません」]。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。」…『コリント人への手紙第二』5章17節。人の心は新しくされなければならない。そして「罪と悪の原理」に打ち勝ち、義と平和を作るために戦わねばならないのである。

【2】剣を取る者は剣で滅びる(マタイ26:52)；

(1)先程読んだ「今月の言葉」の後半はこうである;「目の前で剣を抜いて戦おうとしている者たちにキリストは言った;「**剣をもとに納めなさい。剣を取る者はみな剣で滅びます**」と。剣を取って戦う所に平和はない。そこにあるのは殺し合いであり「滅び」である。剣を取らずにすむ道、剣を鞘に納めて対話する道を選び取らなければならない。そうでなければ「みな剣で滅びます」と言う時が来てしまうだろう。そうなるからでは遅いのである。いつも平和のために祈り「**平和を作る者**」(マタイ5:9)となろうではないか。」

(2)キリストは「**剣(ツルキ)**をもとに納めなさい。剣を取る者はみな剣で滅びます」と言った。この言葉の背景はこうである。「最後の晩餐」を終えた主イエスは、オリブ山のゲツセマネの園に行かれた。そして激しく何度も祈った。「ゲツセマネの祈り」と呼ばれる切なる激しい苦闘の祈りである。ルカによれば、「**イエスは、苦しみもだえて、いよいよ切に祈られた。汗が血のしずくのように地に落ちた**」(ルカ22:44)という。その祈りが終わると間もなく、「**剣や棒を手にした大勢の群衆**」(マタイ 26:47)が現れた。彼らは単なる群集ではなく、「**祭司長、律法学者、長老たちから差し向けられた**」者たちである。彼らの先頭にいたのは弟子のユダである。暗闇の中でイエスがどこに居るのか、どれがイエスなのかを知らせる合図としてユダが選んだのは「**口づけ**」であった(48)。**49節**;「**それで、彼はすぐにイエスに近づき、「先生。お元気で。」と言って、口づけした**」。この「先生」と訳された言葉の原文はユダヤ教の最高指導者たちに対する尊称「**ラビ(rabbi)**」である。

ユダはイエスを抱き、頬に口づけしながら「ラビ」と言った。すると、**50節**;「**イエスは彼に、「友よ。何のために来たのですか。」と言われた。そのとき、群衆が来て、イエスに手をかけて捕えた。**」。

(3)その時、弟子の一人が短剣を引き抜いた。そして主イエスを捕らえようとしていた男に切りかかった。**51節**;「**すると、イエスといっしょにいた者のひとりが、手を伸ばして剣を抜き、大祭司のしもべに撃ってかかり、その耳を切り落とした。**」

ヨハネが伝えるところによれば、「イエスのそばに立っていたひとり」とはペテロのことで「耳を切り落とされた大祭司のしもべ」はマルコスという男である(ヨハネ 18:10)。これは如何にも熱血漢で直情型のペテロらしい行動であった。だが、彼のこの行動は大流血を招きかねない危険な行動であった。双方に緊張が走った。耳を切り落とされたマルコスの仲間たちが一斉に剣を抜いたた。

(4)その時である。キリストの凜とした声が響き渡った。52節;「そのとき、イエスは彼に言われた。「剣をもとに納めなさい。剣を取る者はみな剣で滅びます。」。これはペテロに向けた言葉であると同時に、その場にいた全員に向けた言葉である。キリストは剣を抜いて睨み合うペテロと兵士たちを制しながら「やめなさい。それまで！」と仰った(ルカ22:51)。そして、血を流しているマルコスの「耳にさわって彼をいやされた」(同)。これが、主イエスが行なった最後の奇跡となった。そして、もしもこの時、主イエスがこの奇跡を行なわなかったならば、そこは修羅場と化し、弟子たち全員が大きな悲劇に襲われたことは確実であった。即ち、主イエスと共に逮捕され、主イエスと共に裁判にかけられ、十字架刑に処せられた可能性も捨て切れなかった。主イエスは、この奇跡によってマルコスの傷を癒したのみならず、ペテロや弟子たちの命を守った。そして、自ら進んでご自分を敵の手に委ねたのである。紀元30年4月7日金曜日の真夜中のことだった。

【3】核兵器を取る者は核兵器で滅びる;

(1)あの夜キリストは言った;「剣をもとに納めなさい。剣を取る者はみな剣で滅びます」と。あれから二千年。今や「剣」は「原爆」となり「核兵器」となった。このキリストの言葉は今や「原爆をもとに納めなさい。原爆を取る者はみな原爆で滅びます」となり、「核兵器をもとに納めなさい。核兵器を取る者はみな核兵器で滅びます」という言葉となって全人類に響くこととなった。

にも拘らず、核兵器を使いたがる人間は存在する。ベトナム戦争で敗れたアメリカ軍の総司令官は、「アメリカの失敗は核兵器を使用しなかったことだ」と述

べた。アホで無知な人間が言ったのではない、世界最大の軍事力を誇るアメリカ軍の最高指導者が言ったのである。これまで何度も実際に核兵器が使用される寸前まで行った。アメリカだけでも、1950年の朝鮮戦争、1962年のキューバ危機、1973年の第四次中東戦争、1991年の湾岸戦争で核兵器の使用が検討された。湾岸戦争では核兵器の代わりに化学兵器が使われたが、帰国したアメリカ兵士たちから生まれた子供達に肉体的・精神的異常が多発した。

(2) 先月『私達は核兵器を作った』というドキュメンタリーが放映された。それによれば核兵器製造工場で悲惨な事故が頻繁に起きていた。実に危険極まりないものを人類は作り続けているのである。危険な事故と沢山の犠牲者を経て作られた核兵器の数は凄まじい数に上る。全世界には今、広島・長崎型原爆に換算して15万発相当の核弾頭が存在すると言う。それらの核兵器が使われたら人類はどうなるか？間違いなく「滅びる」。「核兵器を取る者はみな核兵器で滅びる」。

何としても核兵器の使用は阻止せねばならない。それにもまして、核兵器を廃絶せねばならない。そのために私達に何ができるのだろうか。私達ができることは微々たるものかも知れない。しかし、その微々たることを怠り、諦めていたら、取り返しのつかないことになる。「剣を取る者はみな剣で滅びます」「核兵器を取る者はみな核兵器で滅びます」と言う時が来てからでは遅すぎるのである。今できることを今始めよう。キリストはこう仰った；「平和をつくる者は幸いです。その人たちは神の子どもと呼ばれるから。」…『マタイの福音書』5章9節。

(3) 今、世界の20カ国で日本のある漫画が読まれつつある。私も昔子供たちと夢中になって読んだことがある漫画で、中沢啓治作『はだしのゲン』という漫画である。日本語版で全10巻という大作であるが、英語やスペイン語は勿論アラビア語にも翻訳され、それぞれの国の言葉で読書会さえ開かれていると言う。この漫画は著者が広島で原爆に被爆した体験をもとにした自伝的漫画である。そして自分の体験がもとになっているだけにリアルで、強烈な反戦・反原爆漫画

となっている。こういう漫画を通して世界中の人が原爆の悲惨さと残忍さに目覚め、核兵器廃絶の声をあげるようになれば良いと思う。

かつて第一回広島平和音楽祭で美空ひばりが「**一本の鉛筆**」という歌を歌った(1974)。こういう歌詞である;「一本の鉛筆があれば、戦争がいやだと私は書く。…一本の鉛筆があれば、八月六日の朝と書く。一本の鉛筆があれば、人間のいのちと私は書く」。作詞は松山善三。映画『人間の条件』などの監督で女優・高峰秀子の夫である。

慶応義塾の創立者・福沢諭吉が好んだ言葉に「**ペンは剣よりも強し**」という言葉がある。「ペンは剣よりも強し」いや、強くあらねばならない。たとえ一本の鉛筆でも平和を作るために用いることができる。一つの歌でも平和を作るために役立つことができる。そうでなければならない。

なによりもキリスト者には「祈り」という「平和の武器」がある。この「平和の武器」を平和のために用いなければいけない。平和のために祈り、平和を作るために自分に何ができるかを考えよう。そして、自分にできる所から、今できることを、始めよう。

平和の君であるキリストはこう言われる;「**剣をもとに納めなさい。剣を取る者はみな剣で滅びます**」、「**平和をつくる者は幸いです。その人たちは神の子どもと呼ばれるから。**」

◎「**平和の祈り**」(アッシジのフランシス;1182?~1226);

「主よ、あなたの平和の道具として私をお使い下さい。 憎しみのあるところに愛を、 いさかいのある所にゆるしを、 分裂のある所に一致を、 疑惑のある所に信仰を、 誤っている所に真理を、 絶望のある所に希望を、 闇に光を、 悲しみのある所に喜びを もたらすものとしてください。 慰められるよりは慰めることを、 理解されるよりは理解することを、 愛されるよりは愛することを、 私が求めますように。 私達は、与えるから受け、ゆるすから赦され、 自分を捨てて死に、永遠の命をいただくのですから。 アーメン。」◇